

博士論文概要

論文題目

神仏習合儀礼の場の研究
－ 神道灌頂を中心として－

A Study on the Syncretistic Ceremonial Site
－ Focusing on the “Shinto-Kanjo”

申請者

米澤	貴紀
Takanori	YONEZAWA

2013年5月

(受理申請する部科主任会開催年月を記入)

近世以前の日本で広く信仰された神仏習合は、寺社建築を取り巻く文化の形成に大きな影響を与えた。しかし、明治期の神仏判然令により、その実態が失われて久しい。神仏習合の歴史、教学・理論については、史学・宗教学・民俗学などの分野を中心に長年の研究成果が蓄積されてきており、その総体を視野に収めることが可能となってきた。また重要史料の翻刻公刊が行われるなど研究基盤が整えられ、神仏習合研究がさらに多分野にわたる発展を見せている。しかし、建築史学においては、神仏習合が堂塔社殿の建築物の形態に及ぼした影響が少なかつたため、直接神仏習合を扱った研究が十分に行われて来なかった。一方で、建築物と内部空間の意匠や形式を分類・分析するのみではなく、建物をその使われ方、建築を人々の動きを伴った場として理解する視点からの研究が、密教儀礼や寺社での法会を題材として行われてきた。

以上の背景にもとづき、本研究は神仏習合が生み出した儀礼、特に神道の秘儀・秘説を師弟間で相伝する重要な儀礼であった神道灌頂を中心に扱い、その分析を通して「儀礼の場の特質」、「場を作り出す志向性」を示したものである。これまでの神仏習合研究は、儀礼の次第と教学に関するものが多かったが、本研究では神道灌頂が人の参加する儀礼であることを意識し、灌頂の場、すなわち受者が設えに込められた教説を理解し、その背景にある宗教世界を感じ取ることを目的として作られた場を扱い、理念が現実世界に形として表現されたものを分析・考察することが特徴である。研究の方法は、儀礼書にある灌頂道場やその設えの記述・図、実際に行われた神道灌頂の記録をもとに場の構成の分析を行い、そこに込められた意図を読み解いた。また近世における神仏習合神道を取り巻く社会背景の変化が、こうした構成や意図に大きな差をもたらしたことを明らかにした。

本論文は序論、本論7章と補章2章、結論から構成される。以下に各章の概要を示す。

序論では研究の背景を記し、本論文の目的と、各章の内容の概要を示した。また先学の研究を概観し、本論文の位置を示した。

第一章では、はじめに神仏習合の歴史的展開と神道灌頂についてまとめ、神仏習合思想と寺社建築の関係を整理し、本論文内での位置づけを行った。そして、神道説の秘説伝授の儀礼が密教儀礼である灌頂の形を取ったこと、和歌や日本紀などの秘説伝授の儀礼も同様に灌頂の形をとったことを挙げ、中世における伝授儀礼として灌頂が用いられたことを確認した。また、灌頂の舞台となる灌頂道場は建物の中に舗設として作られるもので、密教における灌頂堂のように、神道灌頂を目的とした建物は作られなかったであろうことを類推した。

第二章では、神道灌頂の場の具体的な事例として、三輪流神道の神道灌頂を挙げ、神道要素と仏教要素を分析し、密教の灌頂と比較を行った。神道灌頂はその次第、道場ともに密教灌頂の構成を骨格とし、そこに神道要素を加えることで作られていた。神道要素は目に見える形で示され、受者は師からその説明を受ける

ことで、秘説を理解した。当時の僧侶、貴族、武士らが灌頂の権威を理解していたと考えられることから、密教灌頂を骨格とすることが儀礼の権威付けに繋がっていたことを示した。密教を骨格とし、神道要素を象徴とするこの構造こそが神道灌頂の場の特質であり、教義・儀礼の整備・発展、権威付けが目指された時代背景によって生まれたものといえよう。また神道灌頂道場は、儀礼の次第、舗設の作り方が決まっているものの、儀礼の場全体の形、配置については道場が作られる建物に応じて変形・工夫がなされていた。

第三章では、神道灌頂が行われた道場の規模と建物、寺社との関係を灌頂関連文書から見た。神道灌頂道場の規模は文書中に方三間と書かれており、これが基本的な大きさと認識されていたと共に、荘厳を行い、受者が動くためにも必要最小限の広さと考えられる。加えて、この方三間を意識した道場の理想形があったことを示した。一方で、実際の灌頂道場では、実修にあたって必要な空間を確保し、また会場となる建物に合わせるため壇の大きさを変え、別室に小壇を設けるなどの変形がなされ、調節が行われていたことを示した。なお、印可灌頂のように神道灌頂よりも少ない設えですむ儀礼では二間×三間が最小限の規模であったことを史料から示した。加えて、神道灌頂道場が作られた建物には仏堂、神社の拝殿があり、仏教・神道どちらの建物でも行われたことが確認できた。

第四章では、室町時代の吉田神道以降の近世の神道を検討した。神道は国学や儒学などからの解釈によって新たな展開を見せた。その多くは古典を考証し、解釈・注釈を加える中で神道を日本古来の生き方と捉え、中世の神仏習合説に見られるような仏教や説話などからの牽強附会の教義を批判した。これらの神道説のうち、吉田神道と橘家神道の儀礼を具体的に挙げ、分析した。吉田神道では仏教の儀礼概念を基本とし、そこに陰陽道を取り入れた儀礼の場と設え、神道による清祓などの次第によって構成されていた。橘家神道では儀礼と次第は神道にもとづき、理論と設えには五行説が用いられ、行者が一見して設えの意図を理解できるものであったことを示した。このように神道儀礼をもとにして陰陽道や五行説を取り入れた習合が可能になったのは神道が宗教として成熟してきた証拠であることを論述した。

第五章では、真言僧・慈雲を創始者とする雲伝神道を扱った。雲伝神道は、他の神道各派・学者からの神仏習合批判の中で、密教にもとづく習合神道の立場を保った流派であり、同じ真言宗の影響下で成立した中世以来の三輪流神道の説を附会として批判するなど、時代に則した考えを持っていた。この近世的な習合神道が作り出した神道灌頂の場は、密教の灌頂の骨格に神道要素を付け加えただけではなく、日本神話のみに依拠した設えが新たに作り出されていた。この背景には国学・儒学の興隆により「神道」がより強く意識されるようになり、考証学の発達が教説・理論の正当性を評価するようになったことがある。神仏習合神道も仏教との附会と取られる説に拘泥することなく、神道に重きをおいた説を展開す

るようになった。儀礼の場もこの説に適うものとなり、先に挙げたような仏教要素のない設えが作られたのである。この設えは受者が体感することで師の教えを理解するためのものであり、これは近世的な特徴であることを考定した。

第六章では、三輪流神道と雲伝神道の神道灌頂の比較を行い、中世的な灌頂の場と近世的なそれについてまとめ、志向性の違いを考察した。中世の灌頂道場は秘説と血脈を伝える舞台であり、秘説にもとづく構成・設えがなされていた。受者は師からの教えによってその意味が理解できるようになり、この秘密を知るという感覚が儀礼の価値を生み出していた。一方で近世の灌頂道場は、名称と形からその理論・根拠が受者にとって分かり易いように設えられており、神々の満ちた場所で神道説を伝授されたという体験が重要であったと考定した。伝えられる秘説も強引なものではなく、記紀神話や、当時の科学である五行説や陰陽説によって解き明かしたものであった。中世では知識は限られた人の間で伝えられるもので、その秘密性に価値があったのに対し、こうした知識が民衆にも広がった近世では、そこに記された世界や場面を直に追体験することに価値がおかれたことを論証した。

第七章では、これまで見てきた事例をもとに、灌頂儀礼の神道化の進展を考察した。密教僧によって習合儀礼が作られた時代には、権威と神道説の表現を両立させるにあたり、仏教儀礼の骨格に具体的な神道要素を象徴としてまとめた儀礼とした。これは、元来の神道、神信仰は儀礼によって伝授する類の教えを持たず、一方で普遍宗教である仏教は抽象化できる儀礼を持っていたためである。近世になると、神道が「日本古来の教えである」という意識の強まりにより、中世以来の神道灌頂をもとにしながらも、牽強附会の説にもとづいたものは除かれ、神道神話のみから作られたものを新たに加え、より神道化の度合いを強めた。この神道化の進展は神仏習合への批判に対するものとみることができ、日本化という要素を内包していることを指摘した。また、中世以来の神仏習合神道を批判しながらも、二章で示した灌頂の場の特徴は変化していないことを指摘し、神道灌頂が根本的な儀礼として定着していたと推測した。

補章では、ここまでの内容を補足する論考をまとめた。補章一では、神仏習合神道において鳥居に込められた理念とイメージを検討し、鳥居をくぐることが重要な意味を持つこと、神道を表す鳥居に仏教の抽象的な概念を投影し、仏教理論のもとに境内、儀礼の場の構成が決められていたことを示した。

補章二では、大工技術書のなかに見られる護摩壇について検討した。この護摩壇には鳥居が付けられており、この鳥居は社頭に立てられる鳥居と同じ木割（比率）で作られていることを示した。儀礼の設えの作成に大工の知識が用いられていることや、壇の形式から両部神道系の神道灌頂で用いられるものである可能性が高いことを示した。

以上の内容をまとめ結論とした。

早稲田大学 博士（工 学） 学位申請 研究業績書

氏名 米澤 貴紀 印

(2013年 5月 現在)

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
○論 文	神道灌頂の場と建物、日本建築学会計画系論文集 688、2013年6月（掲載決定）、米澤貴紀
○論 文	三輪流神道灌頂の場の特質、日本建築学会計画系論文集 687、2013年5月、米澤貴紀
○講 演	木割書に記された護摩壇について、日本建築学会関東支部研究報告集 83（Ⅱ）、2013年3月、米澤貴紀
○講 演	習合神道における鳥居の性格について、日本建築学会学術講演梗概集、2012年9月、米澤貴紀
○講 演	六條八幡宮境内の特質、日本建築学会大会学術講演梗概集、日本建築学会、2009年7月、米澤貴紀
○講 演	鶴岡八幡宮寺における仏事の場としての建物の役割、日本建築学会大会学術講演梗概集、2008年8月、米澤貴紀
○講 演	奈良・平安時代の文献に見る神宮寺の成立と寺院規模について、日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2、2007年7月、米澤貴紀
○講 演	鶴岡八幡宮寺における宮寺の名称と建築について、日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2、2005年7月、米澤貴紀
その他	
(著 作)	両国公会堂実測調査報告書、早稲田大学中川武研究室、2013年3月、中川武、小岩正樹、米澤貴紀、伏見唯
(著 作)	木砕之注文、中央公論美術出版、釈文作成・現代語訳作成・参考図作成を分担担当、2013年2月、中川武、永井規男、溝口明則、河津優司、坂本忠規、佐々木昌孝、小岩正樹、米澤貴紀、山岸吉弘、伏見唯
(著 作)	文化遺産の保全と復興の哲学- 自然との創造的関係の再生、早稲田大学出版、第3章（pp. 51-71）を担当、2012年4月、中川武、米澤貴紀、他3名
(著 作)	よくわかる日本建築の見方、JTB出版、第3章（pp. 94-103、112-113）担当、2012年4月、中川武、佐々木昌孝、米澤貴紀、伏見唯、
(著 作)	和泉屋本店実測調査報告書、早稲田大学建築史研究室、2012年3月、中川武（監修）、米澤貴紀

早稲田大学 博士（工 学） 学位申請 研究業績書

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
（著 作）	高坂商店実測調査報告書、早稲田大学建築史研究室、2012年3月、中川武（監修）、米澤貴紀
（講 演）	木碎之注文に見られる寺社、建物、年紀、人物について、日本建築学会学術講演梗概集F-2、pp.657-658、日本建築学会、2011年8月、米澤貴紀、中川武、他8名
（著 作）	料亭花の里実測調査報告書、早稲田大学建築史研究室、2010年12月、中川武（監修）、米澤貴紀、小岩正樹
（国際会議）	A Study for the Geographic Condition of Shrines in Tsushima, The 8th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia Proceedings, pp.414-418, Architectural Institute of Japan, 2010年11月, Takanori Yonezawa, Takeshi Nakagawa, Minsuk Kim
（講 演）	『木碎之注文』を通して見た中世高良大社本殿平面形式の復原、日本建築学会関東支部研究報告集80（Ⅱ）、pp.39-40、日本建築学会関東支部、2010年3月、米澤貴紀、中川武、他8名
（著 作）	割烹美家古向島本店実測調査報告書、早稲田大学建築史研究室、2009年11月、中川武（監修）、米澤貴紀、小岩正樹
（著 作）	弘福寺客殿実測調査報告書、早稲田大学建築史研究室、2009年3月、中川武（監修）、米澤貴紀
（著 作）	曳舟湯実測調査報告書、早稲田大学建築史研究室、2008年10月、中川武（監修）、米澤貴紀
（著 作）	旧料亭明月実測調査報告書、早稲田大学建築史研究室、2008年3月、中川武（監修）、米澤貴紀
（著 作）	旧安藤家住宅実測調査報告書、早稲田大学建築史研究室、2007年11月、中川武（監修）、米澤貴紀
（国際会議）	A Network of Politics, Culture, and Worship on Genkainada (3), The 6th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia Proceedings Volume I, pp.378-383, Architectural Institute of Korea, Nov. 2006, Takanori Yonezawa, Takeshi Nakagawa, Minsuk Kim, Nozomi Tamura
（著 作）	日韓交流史から捉えた玄界灘における政治・文化・礼拝ネットワークに関する研究 調査報告書、早稲田大学建築史研究室、2006年10月、中川武、坂本忠規、金玟淑、米澤貴紀

早稲田大学 博士（工学） 学位申請 研究業績書

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
（講 演）	海神を祀る神社の祭神の性格と立地条件の関係ー壱岐の式内社についてー、日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2、p. 61-62、日本建築学会、2006 年 7 月、米澤貴紀、中川武、金玟淑
（著作）	照田家住宅実測調査報告書、早稲田大学建築史研究室、2006 年 11 月、中川武（監修）、小岩正樹、米澤貴紀
（講 演）	宗像大社の三宮構成の性格について、日本建築学会関東支部研究発表Ⅱ、pp. 261-264、日本建築学会関東支部、2006 年 3 月、米澤貴紀、中川武、坂本忠規、金玟淑